

日時 2016. 10. 30 (日) 曇天
山域 静岡県勤労者山岳連盟主催 安全登山講習会 @静岡市清水区役所
大蔵 善福氏 (よしとみ・65歳) 講演 「山は偉い・人間形成と教育の場としての登山」
コース 下土狩10:00-清水11:10-区役所12:30-区役所発16:10
-裾野17:30
参加者 小松(理事)、後藤、沖、小島=4名

荒天のときこそ山に行く、何かが見つかる

中学、高校時代を過ごした清水を数年振りで見訪れた。昔は只の棧橋と工業地帯、木場だった処が今ではさかなセンター、観光客で溢れかえる。思わず、沼津の港湾と同じと感じた。考えることは皆同じだ。日曜で賑わう観光施設で昼食 海鮮どんぶり980円で味噌汁、かまの煮付け付き。先日の事件から学習し、注文5分後に『おねーさん、海鮮丼はまだ・・・』

13時から大蔵氏の講演を拝聴。十八のときから、かの有名な、軍鶏(しゃも)と呼ばれた「今井道子女史」の薫陶を受けた猛者。胸板のぶ厚さと足腰のスリムさが印象的。

講演内容は多岐にわたり、一言で述べることは難しい。本人の脳裏では起承転結が成立しているようだが、凡人には理解が及ばない。以下に印象的な話を、順不同で列記します。

① マッキンリーの風=27年、マッキンリーに通い、山頂付近の気象観測を実施。リーダーが成果や知見を尋ねると、ベースキャンプでの気温気圧の傾向と相関があるとの事。この一連の話を整理してみると、大蔵氏の経験や問題意識、努力、知性が見てとれ、とても印象深く、元エンジニアの端くれとして良い勉強となった。以下箇条書きでプロセスを説明します

- ・ チョモランマ北壁で50m/sの風に遭遇し進退極り、冬山最大のリスクは強風と悟った
- ・ マッキンリーの強風で複数の友人を失い、風という運命的な課題を見出した
- ・ マッキンリーやチョモランマの様な高峰の風を調べたが、観測データが無い
- ・ 無いなら自分で計測するしかない、長期間のデータを愚直に収集した
- ・ このデータと、ベースキャンプで日常的に計測している、気温気圧の傾向との相関を調べた
- ・ 気温気圧が急低下して急上昇する場合、7割の確率で強風が吹く。風は西、東風で、南北の風は少ない。この検出に8年かかった

この内容と思考過程は秀逸の一言と感じた。

- 明確な目的(遭難を減らしたい)
- 的確な手段(現地の風を測定する)
- 粘り強い調査(27年のデータ積み重ね)
- 実用的な解析(日常的に計測してるデータとの比較)

凡百な研究者や技術者は、往々にして目的と手段を混同する。また多くのデータとの相関を調

べ、グラフを大量に作り混乱自滅する。一方大蔵氏はベースキャンプでの情報という入手容易なデータとの相関を調べた。決め打ちで危険な選択だが、実用的でセンスの良さを感じさせる

- ② 雪の文化と氷の文化＝比較人類学で、東アジア（主に日本）欧米（特に西欧）とを特定のキーワードで選別して、地形、気候、民族、宗教等との関係を論じる場合が多い。

日本＝温暖湿潤多雨、木の家、穀物食、米食、粒食（御飯）、多神教

西欧＝寒冷乾燥少雨、石の家、肉食、麦食、粉食（パン、パスタ）、一神教

これらがよく言われる

雪の文化と氷の文化との切り口は初見で興味深い。言われてみるとその通り。

大蔵氏いわく、世界的には1.5m以上に積雪地帯には人は住まないとの事。一方日本の豪雪地帯では数mの積雪は日常茶飯事。雪の中での暮らし、文化が根付いている。この原因は地理条件。日本では日本海で発生した水蒸気が、シベリア寒気団で運ばれ日本海側では冬は常時降雪。山岳地帯では高度と共に気温が低下し、更に降雪して豪雪。雪の文化が発達した。

欧州やシベリアと言った高緯度地域は寒い、海から水蒸気が運ばれないので、雪は少なく氷となる。氷の文化が発達。そういえば、日本では雪山をくり抜いてかまくらを作り、エスキモーは氷塊を積み上げてイグルーを作る。

- ③ 日本の自然は山が産んだ＝日本の自然の多様性は山があるから。

一例として高山植物やライチョウ。これらは氷河期に北方から南下した種が、温暖化で行き場を失い、山岳地帯に残ったもので稀少。仮に山が無ければ絶滅したはず。日本の自然は稀有で後世に引く継ぐべきもの。

私見だが、日本の風土や自然は、海と風、山による水の循環がポイントと思う。

太陽が海を温め、大量の水蒸気を産む。それが風に乗って山にぶつかる。上昇した水蒸気は結露して雨雪を大地にもたらす。その水が木々をはぐくみ、動物をやしない、山をけずる。川の流が肥沃な耕地を作り、海にミネラルを補給して、プランクトンをそだてる。水と共に生命が循環して、多種多様で変化に富んだ自然が生まれた。

- ④ 山に住むのは、悪魔か神か＝東アジアで仙人は、人が山に、と書く。

東アジアは多神教で、山、川、湖、海、大木と全ての自然物に霊性を感じて、崇め敬う。

欧米では神はひとつ。自然は人間が支配すべきもので、山に神はいない。

欧米の登山はスポーツとしてのアルピニズムで18世紀ころから。それ以前山は魔物の領域で忌諱された空間だった模様。日本では山岳信仰が発端で奈良平安時代の模様。日本の登山は歴史の長さ以外に、人口比率でも多いとのこと。特に中高年が山に行くのは日本くらい。

- ⑤ まず行動して気付く、学ぶのは後でいい＝子供の教育に登山は最適。このときなるべく手は出さず、教えない、本人の気付きに任せる、自発性が醸成される場を作る。

私見＝その通り、全くおっしゃる通り。だが、昨今はそれが、簡単には出来ない。帰路の皆さんも言っていたが、今の社会は余裕がない。失敗してそこから学ぶことは大切だが、安全とか権限、効率、責任、プライバシー保護などが優先され、自由な行動や失敗、事故が許されない。企業の教育でも、安全の為、最初から正解を教える。そして正解以外の行動を許さない。結果応用力の無い、ひ弱な人材しか育たない。凡人には妙案がうかばない。

- ⑥ 荒天でも山に行く＝山行のとき、天気が悪いと欠席する人が多い。山は晴ればかりではない。天気が悪いなら悪いなりの、発見や経験、気付きがある。そこから自己責任や危機管理能力を学ぶことが出来る。言うは易し、行うは？？？

以上、自分勝手な解釈での報告です。

感激共感できる話、首を傾げたくなる話、眠くなる話など多くの知見を得ることが出来ました。大蔵氏とこの会を運営いただいた役員の皆さま、会に誘っていただいたリーダーに感謝いたします。

その他の記述（後藤）

1. 登山者は、自然の代弁者＝山・自然は何も言わないので、登山者が山に上り、感じたことを記録に残したり、発露することが大事。漫然と山に上るのではなく・・・。
2. 山は自然の大元＝大げさに言えば、全ての事象は、山から始まっている。その山に上ることは全てを把握することになる。
3. 氏は、長野県飯田市出身。現在65歳。身長は、私よりなかったが、体躯は、鋼の如きだった！！
4. 山で多くの仲間を亡くした。その十字架は一生背負って行く。それが私も「安全登山の原点」何故、その結果に至ったか、自問自答し考査し生かすことが、残されたものの使命。
5. エベレストで70mの風に遭った。マッキンリーは27年通っている。今年も上った。
6. とにかく、山の経験を沢山積みことが大事なことだ。悪天候でも絶対、山に行く。逆に好天気に山に上っても、何も残らない！！
7. 山の会に入会は必要。何故なら、仲間は助けてくれる。登山届は、警察に出しても意味がない。助けてくれる仲間に出すのが当たり前だ
氏のHPには、「サンガクエントリー」という、登山届システムがある。詳細は不明だが、いずれにしろ「無料」では、限界があるだろう。
<https://sangaku-entry.com/login.cgi>
8. マッキンリーは、最大風速84mが観測された。気温は-70度。現在は、大掛かりな観測設備でなく、例えば気温は「炭素棒の曲がり具合」で計測している。
9. 植村直巳遭難は「風で飛ばされた」が定説だが、実は当日、登山者が飛ばされるような風は吹いていなかった。従って、植村遭難は、風以外のモノだった。山田昇遭難は、50m以上の風が吹いていたので、「風遭難」の可能性が高い。いずれにしても、山岳において「風」が、最大・最強の曲者・難物である。
10. 氏のツアーの参加者は、皆、氏より年齢が上で、マッキンリー・ヒマラヤに上っている。これは日本独特なモノで、いかに登山文化が豊かであるかということ。欧米では考えらず、多くの「老人」は、日和見でパイプを揺るがせ、「登山者観察」にいそしんでいるとのこと。
11. 今回の講演会は、久しぶりに「手ごたえのある」ものだった。この秀逸な講演会を多くの会員が聞けなかったことは、はなはだ残念だった。山は常に積極的でありたいものです。

以上



清水丼 まぐろ、シラス、桜エビ



駿河丼 生シラス、生桜エビ